

香芝―古代史の謎を探る⑦

大津皇子の悲劇

塚口義信
水谷千秋

二上山は、われわれ香芝市に住む者たちにとって、“心のふるさと”と言ってよいかもしれません。うれしいとき、悲しいとき、つらいときなど、無意識のうちには、ふと二上山を眺め、駆け巡るさまざまな思いを二上山と分かち合っていることが少なくないのではないのでしょうか。“ふたかみの里”の住人にとって、二上山はもはや、心の一部になっていると言っても過言ではないでしょう。

ところで、その二上山の雄岳（五・一五メートル）の山頂に、日本の律令国家の基礎を築いた天武天皇の皇子の大津皇子（六六三―八六）の墓があることを、ご存じでしょうか。もともと、この墓が本当に大津皇子の墓であるのかどうかと言えば、それは不明と言わざるを得ないのですが、しかし『万葉集』によると、たしかに大津皇子は「蘇の二上山」に移葬されたと記されているのです。

では、この大津皇子とはいったい、どのような人だったのでしょうか。今回は、七世紀後半の権力闘争の渦中に巻き込まれ、謀反を企てたかどで処刑された「悲運の皇子」として知られる大津皇子について、若干の考察を試みてみました。

ただ、紙幅の関係で論じ残した点や、いまだ謎に包まれている部分が少なくありませんので、わたくしたちは、みなさんが今後、このレポートをたたき台にさまざまな“大津皇子論”を展開されることを期待しています。

大津皇子の変

壬申の乱(六七二年)によつて王位を勝ち取り、それ以後は「現人神」ともたたえられて権力をほしいままにしていた天武天皇が崩御したのは、即位後十五年目(六八六年)の九月九日のことでした。天皇には全部で十人の皇子がいましたが、皇后の鸕野讃良皇女(のちの持統天皇)の産んだ草壁皇子が、二男(三男とする説もありますが)、ここでは仮にこのようにみておきます)ではありますが、すでに皇太子に選ばれていました。しかし皇太子はすぐには即位せず、母の鸕野讃良皇女がいったん政務を執ることになりました。

さて天武崩御から二十日余りしか経っていない翌月二日、京を揺るがす大事件が勃発します。天皇の三男(四男とする説もありますが、ここでは仮にこのようにみておきます)の大津皇子の謀反が発覚したとして、共犯者三十人余りとともに逮捕されたのでした。翌日には、ただちに大津皇子の処刑が実行されました。皇子は、辞世の和歌と漢詩の両方を残しています。

百伝ふ 磐余の池に鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

(磐余の池に鳴いている鴨を、今日を限りに見て、私は死んでいくことであろうか。)

〔万葉集〕卷第三十四(六)

五言。臨終。一絶。

金鳥臨西舎。鼓聲催短命。泉路無寶主。

此夕離家向。

金鳥西舎に臨み、鼓声短命を催す。泉路寶主なし、此の夕 誰が家にか向かはん

(日は西のやかたに傾き、時刻を告げる太鼓の音はわが短い命をせきたてる。迎えてくれる主人もいない黄泉路の一人旅、今宵このわれいずこに宿るやら。)

〔懷風藻〕「小鳥憲之」王朝漢詩選「岩波書店による」

皇子はこのとき二十四歳、妻の山辺皇女は髪を振り乱し、素足のまま遺体に駆け寄つて狂乱のうちに殉死したと言います。

不可思議なのは、その後、ひと月足らずのうちに下された共犯者たちへの処遇です。それは意外にも寛大なものでした。ふたりが流罪となつたほかは、全員、罪を許されました。大津皇子にだまされてこの計画に加つたに過ぎないのだから、というのがその理由です。捕えた翌日に弁明の機会も与えず処刑した大津皇子への冷酷さとは対照的な、この異様とも言えるほどの寛大さは、たしかに謎めています。古来、謀反を起こしたというのは事実であったのかどうか、冤罪ではなかったかとささやかれる所以がここににあります。

この推理が当たつているとすれば、陰謀の主は、皇后の鸕野讃良皇女(持統天皇)ということになるでしょう。彼女は、夫天武のあとを息子の草壁皇子に嗣がせるために、そのライバルであった大津皇子を毘に陥れたものと思われまふ。のちにも触れますように、草壁皇子よりも、その異母弟の大津皇子のほうが、当時、人望では上回つていたと考えられます。持統天皇としては、

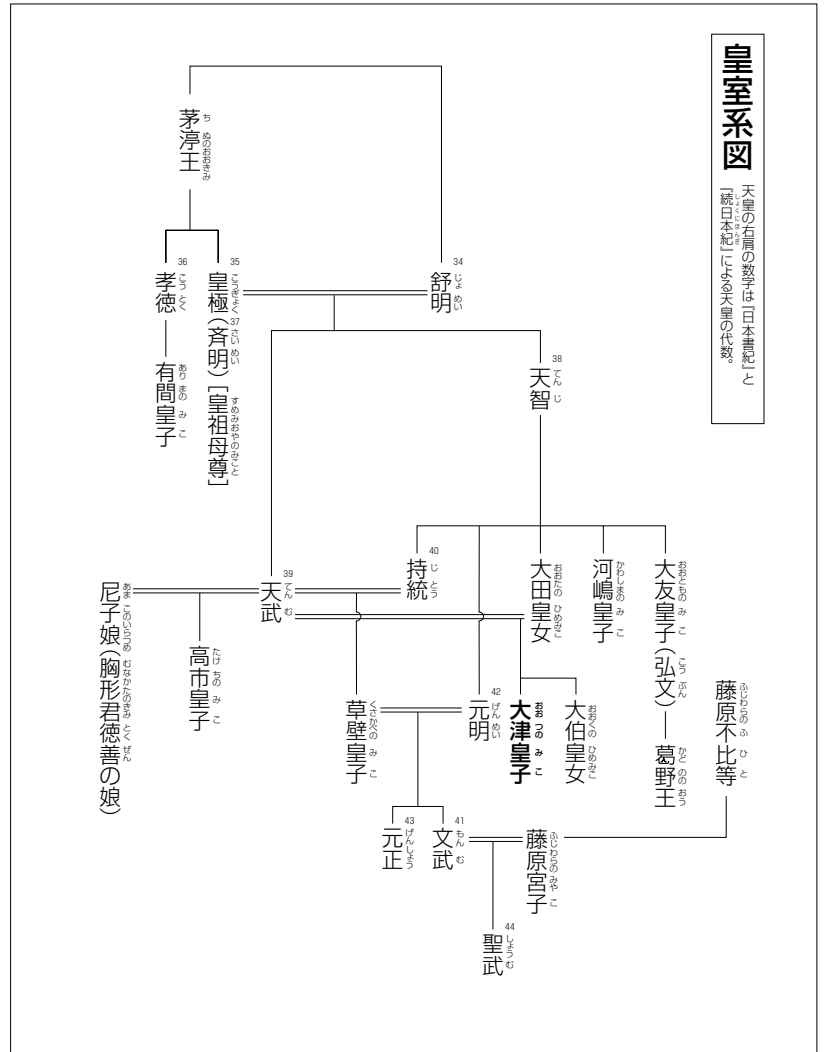
自らの手で大津皇子を亡き者にしたうえで、わが子草壁皇子を万全の状況で即位させたかったのではないのでしょうか。その犠牲となった大津皇子は誠に不運としか言いようがありません。

宮内庁によって管理されている「大津皇子墓」(二上山)



皇室系図

天皇の右肩の数字は日本書紀と
『新日本紀』による天皇の代数。



しかし、かれに天下を望む野心が全くなかったかと言えは、それは断言できません。
天武崩御の直前のことでしょいか。大津皇子は、伊勢の齋宮(伊勢神社に奉仕する未婚の皇女)を務めていた同母姉の大伯皇女のもとをお忍びで訪ねました。姉と弟が何を話し合ったのか、容易には推し量れませんが、大和へ戻る弟を見送った姉が作った一首は、今もわれわれの心に残るうたです。

わが背子を 大和へ遣ると き夜ふけて
暁露に わが立ち濡れし

(あの人を大和に帰し見送ろうとして夜

も更けて暁の露に私は立ち濡れたことだ。)
『万葉集』卷第二一〇五
ふたり行けど 行き過ぎ難き 秋山を
如何にか君が ひとり越ゆらん
(二人で行つても行き過ぎにくい秋山を、
どんなにしてあの方はひとり越えているこ
とやら。)

『万葉集』卷第二一〇六
そこには、弟の行く末を案じる姉の不吉な予
感が映し出されています。結局、これが姉と弟
との永遠の別れとなりました。

吉野の盟約

時は、天武天皇の亡くなる七年前(六七九年)にさかのぼります。即位して八年目の天皇は、皇后の鸕野讃良皇女(持統天皇)とともに、草壁皇子ら六人の皇子を引き連れて、景勝地吉野(奈良県吉野郡吉野町宮滝付近とする説が有力)に行幸しました。このとき、かれら八人は互いに神に対する誓約を交わしました。吉野に随行した六人の皇子とは、草壁皇子・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子です。このうち河嶋皇子と芝基皇子のふたりは、天智天皇の遺児でした。

この六人を前に、まず天武天皇は「私は今日、お前たちとここで誓いを立て、千年後まで事の起らないようにしたいと願うが、どうか。」と言いました。六皇子はそろって同意しました。そこで草壁皇子がみなを代表するように進み出て、「私たち十数人の兄弟は、みな母を異にしておりますが、そのことに関係なく天皇の命に従い、互いに助け合つて逆らうようなことはいたしません。もしこの誓いを破つたならば、この身が滅び子孫が絶えてもかまいません。」と言いました。残りの五皇子も、次々と同じことを誓いました。これ聞いた天皇は、「わが子らはみなそれぞれ異なる母から生まれたが、これからは同母兄弟のように慈しもう。」と言つて、衣の衿を開いて一度に六人の皇子を抱きしめ、「もしこの誓いを破つたら、私の身はすぐにも滅びるだらう。」と誓いました。最後に皇后もまた、天皇と同じことを誓つたと言います。

この盟約は、かつて天皇が壬申の乱の直前に



吉野宮伝承地(現奈良県吉野郡吉野町宮滝付近)

大津皇子の人となり

隠通いんとうしていた因縁の吉野の池で、天皇と皇后、諸皇子が結束し、今後決して争いを起こさないことを誓ったものです。その背景には、壬申の乱の苦い記憶があったと考えられます。天武は、壬申の乱のような皇族同士の骨肉の争いを二度とくりかえしてはならない、との思いにかられていたでしょう。だからこそ、吉野がその舞台に選ばれ、天智の遺児もここに参加しているのです。

そして草壁皇子が六皇子を代表していることから知られるように、この時点で事実上、草壁皇子が天武の後継者に内定したのでした。草壁の母は皇后の鷗野讚良皇女(持統天皇)です。彼女は天智天皇の娘ですから、出自は申し分ありません。しかし草壁の次弟の大津皇子も皇位継承の有力な候補者でした。大津の母は、持統の姉の太田皇女おのらのみこです。本来彼女こそ皇后になるべき人物だったのでしようが、不運なことに天武が即位する以前に亡くなっていました。今をときめく皇后を母にもつ草壁と、母を亡くした大津とでは、どうしてもその立場に差がでます。吉野の盟約の時点ではまた草壁は十八歳、大津は十七歳の若さでしたが、天武は対立の芽は早くに摘んでおこうと考えたのでしよう。草壁皇子がこのとき天武の後継者に内定し、大津皇子は事実上、王位への夢を断られました。そして盟約の一年九ヶ月後、草壁皇子は二十歳になったのを機に、正式に皇太子となりました。

天武天皇十年(六八一年)二月に草壁皇子が立太子したことで、いったん天武の後継者問題は決着したかのようにみえます。しかし、事はそれでは終わりませんでした。ちょうどその二年後の天武天皇十二年(六八三年)二月に、大津皇子が「始めて朝政を聴こしめす(始めて政務を執られた)。」という記事がみえるのです。この記事については、皇太子に準じ、政務全般を主導する任務に就いたのだとする見解もあれば、政務に関する合議に参加するようになっただけのことだとする見解もあつて、研究者のあいだでも解釈に開きがあります。ただ、いずれにしても、これを契機に大津皇子の政治的立場が重要性を増したことは疑えないでしょう。いったん決着したはずの天武の後継者問題が、大津の浮上によつてにわかにも再燃したであろうことは察するに難くありません。では大津皇子とは、一体どのような人物だったのでしようか。『日本書紀』はかれの人となりについて、以下のように記しています。

立ち居振る舞いは高く際立きわだつており、弁舌べんぜに長じ言葉は明晰めいせきである。天智天皇に愛された。成人してからは分別もわきまえるようになり、学問の才を備え、特に文筆を好まれた。漢詩の興隆はこ

謀反人として処刑された人物に対して、これだけの讃辞をおくるのは珍しいことです。つぎに『懷風藻』(奈良時代に成立した、わが国最古の漢詩集)の小伝をみてみましょう。

【万葉集】

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

107 あしひきの 山のしづくに 妹待つと 我立ち濡れぬ 山のしづくに

108 石川郎女の和へ奉る歌一首 我を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに ならましものを 石川郎女が唱和した歌一首

109 大舟の 津守が占に 告らむとは まさしに知りて 我が二人寝し

▼わたしを待つて あなたが濡れたという(あしひきの) 山のしづくに なれたらよいのに

大津皇子、密かに石川女に婚ふ時に、津守連通、その事を占へ露はすに、皇子の作らず歌一首

▼(大舟の) 津守連の占いに 出るだろうとは百も承知で われわれは二人で寝たのだ

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らず歌一首

163 神風の 伊勢の国にも あらましを なにししか来けむ 君もあらなくに

164 見まく欲り 我がす君も あらなくに なにししか来けむ 馬疲らしに

▼(神風の) 伊勢の国に いればよかつたのに なんて来たのだから あの方もいないのに

▼逢いたいと 思うあの方も いないのに なんて来たのだから 馬を疲れさせになのか

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀しび傷みて作らず歌一首

165 うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見む

166 歳の上に 生ふるあしびを 手折らめど 見すべき君が ありといはなくに

▼この世の 人であるわたしは 明日からは二上山を弟として眺めることであろうか

▼磯のほとりに 生えているあしびを 折りたがが見せるべき相手のあなたが いるわけではないのに 右の一首は、今考えてみる、移葬の時の歌らしくない。ひよとすると、伊勢神宮から都に帰る時に、道のそばで花を見て、悲しみ咽び泣いて、この歌を作ったものか。

大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にし て涙を流して作らず歌一首

416 ももつたふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

▼(百伝) 磐余の池に鳴いている 鴨を今日だけ見て 死んでいくのか

大津皇子の御歌一首

1525 経もなく 緯も定めず 娘子らが 織るもみち葉に 霜な降りそね

▼経糸もなく 横糸も決めずに おとめたちが織る 紅葉の錦に 霜よ降らないでくれ

(小島憲之 木下正俊・佐竹昭広編『万葉集』一、二、日本古典文学全集 小学館一九七一年、による)

【懷風藻】

大津皇子 四首。

皇子は、淨御原帝の長子なり。状貌魁梧、姿宇俊逸。幼年にして學を好み、博覧にして能く文を屬す。壯に及びて武を愛み、多力にして能く剣を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘れず、節を降して士を禮びたまふ。是れに由りて人多く附託す。時に新羅僧行心といふもの有り、天文十三年に解を、皇子に認けて曰く、「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず、此を以ちて久しく下位に在らば、恐るらくは身を全くせざらむとて、因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を圖らす。嗚呼惜しき哉、彼の良才を禮みて、忠孝を以ちて身を保たず、此の軒登に近きて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。古人の交遊を慎みし意、因りて以みれば深き哉。」

皇子は、淨御原帝(天武天皇)の長子である。身体容貌が大きくたくましく、人品(度量)が高く奥深かった。幼年の頃から學問を好み、ひろく書物を読んで、文章を書くのが得意であった。壯年になつて武藝を好み、力が強く、剣を扱うことに長じていた。性格はかなりはいま(放逸)であつて、規則に拘束されず、高貴な身分でありながら、下つて人土地位、教養のある人を敬つた。これによつて多くの人々がつき従つた。

時に新羅僧の行心という者がいた。天文や占いをよく理解していた。かれが皇子に言うには「太子の骨相は、人の臣下となる者の人相ではありません。このような人相をしていながら、長く臣下の位にいたまはば、おそらくは天寿を全うすることはできません。」と言つた。そこで謀反の計画を進めた。このようなあざむきに心迷いついに皇子は法に背く行為を圖つてしまつた。ああ惜しいことだ。立派な才能をもちながら、忠孝を守ることによつて自らの身を保護することをせず、悪い僧侶に近づいてついに死罪となる辱めを受けて自決した。古えの人が他人との交際を慎んだという真意は、この事件によつて考えてみれば深い意味があることだ。亡くなつたとき、大津皇子は二十四歳であつた。

五言。奉詔言要。一首。

開鈴臨雪沼。遊日歩金苑。澄清若水深。曉暖霞峰遠。鶯波共絃響。嗚鳥與風聞。群公倒載歸。彭澤宴論。

五言。奉詔言要。一首。

五言。奉詔言要。一首。

五言。奉詔言要。一首。

五言。奉詔言要。一首。

五言。奉詔言要。一首。

〈現代語訳〉

衣の襟を開いてくつろいで御苑の池に臨み、春色に目を楽しませて御苑を逍遙する。澄んで清らかな池の水は深く、暗くほんやりと霞のかつた峰が遠くに見える。宴席ではさわぐ池波は琴の絃の音につれて響き、ささえる鳥の声は風のまにまに聞こえる。御宴に参加した諸公は酔いつぶれてしまつて、さかさまに車に載せて帰るという状態だ。このようであるから、詩と酒に耽つた彭澤の県令、陶淵明の催したような酒宴さえも、この御宴に比べると論ずるに足りない。

五言。遊獵。一首。

五言。遊獵。一首。

五言。遊獵。一首。

七言。述志。一首。

七言。述志。一首。

七言。述志。一首。

七言。述志。一首。

七言。述志。一首。

七言。述志。一首。



大津皇子墓説のある鳥谷口古墳（現奈良県北葛城郡當麻町）

身体容貌が大きくたくましく、器量も高く奥深かった。幼年にして学問を好み、博覧でよく文を綴った。成人して武芸を好むようになり、力も強く剣をよく使った。性格はすこぶる放逸で、規則に拘束されなかった。高貴な身でありながら、へりくだって人士を厚遇した。これによって、多くの人々がかれにつき従った。

いずれも褒めすぎと言つていくくらいの評価です。文武に秀でた、剛毅な青年のすがたを想像することができません。思うに、かれはある種、英雄的な気質の持ち主だったのでないでしょうか。このような性格に魅了され、その将来に期待する人々も多かったと『懐風藻』は記しています。草壁皇子の立太子の二年後、大津皇子が政界の重要ポストに抜擢されたのも、かれを支持する人々の後押しがあったからに違いありません。

国文学者の吉田義孝氏は、壬申の乱で近江朝廷側についたために以後その勢力を失墜させ、鬱屈した気分にあつた有力豪族が大津皇子を支持したのではないかと推測されました。「皇子大津の周辺には、多くの宮廷不満派が蟄集して、そこに隠然たる勢力が形成され」と考へるのです。吉田氏は、大津皇子の「朝政」への参加も、天武・持統側の大津に対する懐柔策と捉えます。宮廷内不満分子の対立感情を沈静化させるために、あえてかれらの期待する大津皇子を政権中枢にとりこんだのだと言つています。

歴史学者の直木孝次郎氏は、別のみかたを

とつておられます。詩人の才があり武勇に秀でた大津は、少年時代の天武の生き写しのようで、父天武は草壁より大津にひかれていたのではないかと推測されました。しかし、皇后を母にもつ草壁と違い、大津には後援者となる母はずでいません。またすこぶる放逸で、ものに拘らないかれの性格についても、天皇として適任かどうか、天武は悩んだのだろう、と言つています。直木氏は、いったん草壁を皇太子にしながら、ちに大津を「朝政」に参加させたのも天武の意志によるもので、「持統—草壁」のラインと「天武—大津」のラインの組み合わせが「対立とまではいかないが、朝廷の二つの中心となり、その周辺に微妙な潮流を作りはじめたのではないかと推察しておられます。

天武は、即位十五年目（六八六年）の五月、重病の床に就きました。そして、国家をあげた祈りも通じないまま、七月十五日に遺言とも言える詔を發します。「天下の事、大小を問わず、悉く皇后と皇太子に啓せ。」、自分亡きあとは、すべて皇后と皇太子に任せるとの言葉です。余命いくばくもないことを悟つた天武としては、大津に思いを残しながらも、信頼できる皇后に後事を託すしかなかったのかもしれない。九月九日、天武は崩御しました。そしてその二十日余りのちに、冒頭に記した大津皇子謀反事件が勃発するのです。

持統帝の策謀

大津皇子の事件のあと、皇太子ではなく皇后の持統が、即位せずに天皇の代行のかたちで

政務を執ることになります。持統としては事件の衝撃が静まるのを待って、草壁に皇位を継がせる考えだったのかもしれませんが、はっきりしたことはわかりません。

しかしその後、彼女にとつて予期せぬ出来事が起こりました。天武の崩御した二年半後（六八九年）の四月、草壁皇子が即位を前にして病死したのです。持統の悲しみは如何ばかりだったろうかと想像しますが、その後彼女は正式に即位し、草壁の遺児で自らの孫の当時七歳だった軽皇子の成人まで、皇位を守りぬくことを決心したようです。以後八年間、持統女帝の時代が続きます。

大津皇子と草壁皇子は、結局のところ二人とも皇位に即くことなく夭折しました。興味深いことにこの二人は、女性をめぐっても恋敵の關係にありました。そしてここでは大津が勝利を取めたようです。『万葉集』には、二人が石川女郎という女性に贈った歌が載せられています。このうち大津が彼女に贈った歌には、珍しい内容の詞書が付いています。

大津皇子、ひそかに石川女郎に婚ふ時、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りませる歌一首。（大津皇子がひそかに石川女郎と会った時に、津守連通がその事を占いによつて暴露したことに對して、皇子が作られた歌一首。）

大船の 津守の占に 告らむとは ま
さしに知りて わが二人寝し

（津守の占いに出るだろうことをまさしく知つていて、私たち二人は寝たのだ）

国文学者の吉永登氏は、この歌について以下のように考察されました。なぜ大津と石川女

郎との密会が、津守連通の占いによつて暴露されたのか。いくら占いでもこれは不思議にすぎない。これはきっと、大津の動静が持統によつて常に監視されていたことを意味するのであつて、津守連通は、秘密警察のような役割を担つていたのではないかと言うのです。おそらくその通りでしょう。歌によると、このことを大津自身も知つていたことになります。かれは、自分の背後に常に密偵が潜んでいることを知りながら、あえて気づかぬふりをして、恋人との逢瀬を重ねていたのです。孤立から破滅に向かつていく自らの運命を、すでに予感していたのかもしれない。

大津の死から一月あまり経つたころ、姉の大伯皇女は伊勢の斎宮の務めを終え、京に還りました。しかしそこにはもう弟はいません。「大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女、哀傷びて作りませる歌（大津皇子の遺体を葛城の二上山に移葬した時に、大伯皇女が悲しんで作られた歌二首）」として、彼女の詠んだ歌が『万葉集』に伝えられています。このうちとくに次の一首は、二上山の麓に住む者たちにとつて、とりわけ胸に沁みる歌です。

うつそみの 人にあるわれや 明日より
は 二上山を 兄弟とわが見む

（現世の人である私は、明日からは二上山を弟と思つて観ることにしよう）

卷一 一六五

参考文献

北山茂夫「持統天皇論」（『日本古代政治史の研究』所収）

吉永 登「大津皇子とその政治的背景」（『万葉—文学と歴史のあいだ』所収）

直木孝次郎「持統天皇」

吉田義孝「大津皇子論」（『文学』一九七二年九月号）

寺西貞弘「麿野皇女と吉野の盟約」（『古代天

皇制史論』所収）

水谷千秋「吉野盟約と天智系皇族」（『日本書

紀研究』第二十一冊、所収）

※塚口義信（堺女子短期大学学長・文学博士）

水谷千秋（龍谷大学講師）

